

高橋美千子

——フランスと日本を歩き来して歌手活動をつづける高橋さんですが、音楽に興味をもったのはいつ頃でしょうか？

3歳か4歳くらいとき、近所の遊歩道でよく友だちと遊んでいたのですが、夕方になると向かいのお姉さんの部屋からピアノの音が聴こえるのです。耳に届く音楽がどれも優美で、わたしの頭の中が、華やかなイメージに彩られていくのを感じました。

小学3年生のときに、どうしてもピアノを習いたくなりまして、お友だちの紹介で小学校の目の前にあったカワイのピアノ教室に通うことになりました。今思えば、最初に買ったもらったピアノもKAWAIでした(笑)。

——念願のピアノ・レッスンが始まり、そこから音楽にのめり込んでいくのですか？

音楽熱は高まる一方で、ピアノと並行して、フルートを演奏したり、練馬区のジュニア・オーケストラではファゴットを担当して、これは、高校3年生までつづけていました。



——歌に目覚めたのはいつ頃のことですか。

高校生になると、音楽熱は少しだけ沈静化していき、どちらかというと、カラオケに興味がいってしまっていて、友だちとひたすらカラオケ通いの日々を送っていました(笑)。とはいえ、進路を決める高校3年生の夏くらいになると、わたしの周りには5人くらい音大志望の学生がいたので、そういう道もある

のかと思いました。

まずは家にあつたタウンページを開いて、音大受験の予備校というところに片っ端から連絡を試みましたが、なかなか相手にしてもらえません。ようやく最後にかけた東京ミューズ・アカデミーという教室が迎え入れてくれました。そんなこんなで、1年浪人の末、東京藝術大学に合格したわけです。

——大学生活はどのようなものでしたか？

大学に入って驚いたのは、ある意味当然なのでしょうが、とにかく競争が激しかった。つねに、コンクールというか、学年の中でも順位づけというものがあって、自分が考えていた音楽の世界が逆転しました。音楽ってもっと自由なものでは？と疑問を抱くようになり、大学2年生のときに、バックパックを背負い、2か月ちかくヨーロッパを歩きまわりました。

パリ・オペラ座やウィーン国立歌劇場、ミラノ、ヴェネツィア、ヴェローナ、フィレンツェ、モデナなどをまわり、さまざまな音楽や人と出会うことで、音楽が大好きだった頃の自分を取り戻すことができたと思います。

——やがて、アンサンブル・プラネタを経て、

古楽の道に入っていきます。

アンサンブル・プラネタは、大手レーベルに所属するア・カペラ・グループで、メンバー全員が、音楽大学の出身者です。基本はピブライトをかけない発声法で、それがきっかけとなって古楽に目を開いたといえます。

そのあと、アニエス・メロンというフランス古楽の歌手との出会いが転機となり、とうとうメロン先生の家に1年半くらい居候して、音楽漬けの毎日を送ることとなりました。

何より驚いたのは、メロン先生と、夫でカウンター・テナーのドミニク・ヴィスさんが、毎日家で聴いている音楽は、ステイキングとかクイーンなのです。常にとつぷりと古楽に浸かっているのではなく、日常生活で音楽をしっかりと楽しんでいる感じがします。

——幅広いジャンルで活躍する高橋さんですが、音楽表現の原点は？

子どもの頃、近所の遊歩道でピアノの音を聴くときが、自分の中でいちばん幸せなひとときでした。わたしの音楽の原点はそこにあるような気がしています。あのときの思いをそっと心に秘めて、いまでも世界のあちこちで、歌いつづけているのかもしれない。

子どもの頃の遊び場だった近所の遊歩道でピアノの音を聴くときが、自分の中でいちばん幸せなひとときでした。



たかはしみちこ ● 声楽家。古楽ルネサンスから現代音楽委嘱作品まで、幅広いレパートリーを持つ。東京藝術大学卒業と同時に、アンサンブル・プラネタとしてボニー・キャニオンよりCDデビュー。その後、5年間にわたり専属アーティストとして活動。2007年、モンテヴェルディ《オルフェオ》にて、バロック・オペラデビュー。清新な歌唱と演技を評価される。古楽の名歌手、アニエス・メロンに才能を見出され渡仏、イェール市立音楽院、パリ市立高等音楽院古楽科で研鑽を積みつづら、フランスでの演奏活動を本格的に始め現在に至る。野村文化財団奨学生、第10回プロヴェンツァーレ国際バロック声楽コンクール第3位入賞(1位なし)。パリ在住。

Ensemble

The New Wave Music Magazine connecting KAWAI with You

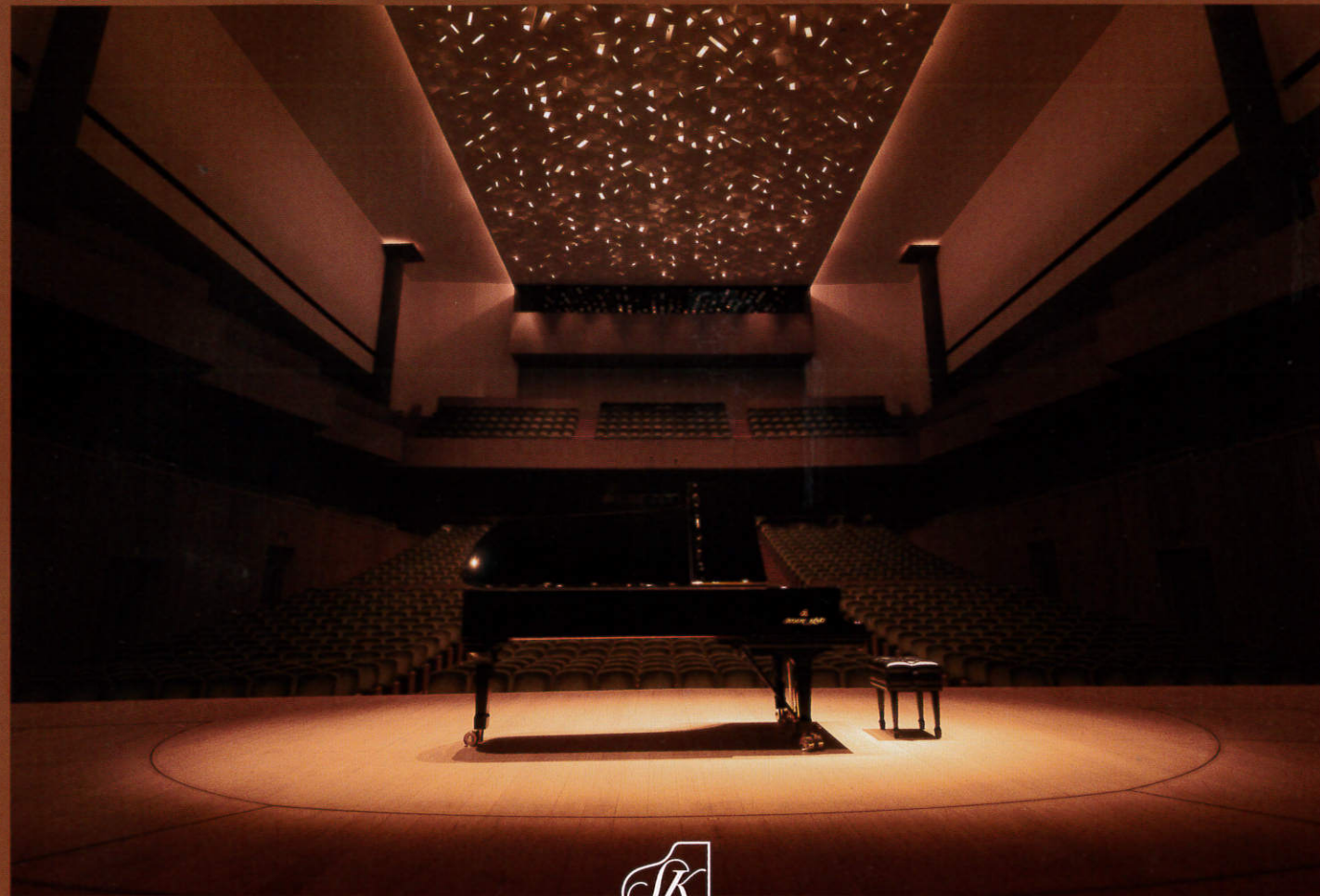
2023 **11** vol.583



楽譜：こどものためのピアノ曲集
「怒りと祈り」 野平一郎

第56回カワイピアノ
コンクール全国大会レポート

特集2：子どもたちの未来のために
お菓子の世界に飛び込んで
劉 優華



SHIGERU KAWAI

夢の道を、寄り添うように。

世界のコンクールで頂きに立つことは、ピアニストにとってもピアノにとっても誉れ高きこと。

寄り添うように夢の道を照らすように、ともに支えあう。

第5回高松国際ピアノコンクールファイナルにおいて、カワイSK-EXで挑んだ3名が入賞し、その輝きを増した。

高松国際ピアノコンクール

2023年2月



Shubei Aoshima

第2位 / 青島周平氏

自分の作りたい音色の幅に良く反応してくれる印象。舞台上で強弱や音色のコントラストを明確に感じることができました。



Nail Mavliudov

第3位 / ナイール・マヴリュードフ氏

SK-EXはステージ上で演奏者と対等なパートナーとなり、無限の自己表現の可能性を与えてくれました。



Yuya Nishimoto

第4位 / 西本裕矢氏

ステージ上で特別な瞬間を味わいながらドラマチックな表現ができるSK-EXの不思議な魅力に惹かれています。